

つたのみ日記 (5)

——小児マヒ その一——

坂元彦太郎

小児マヒが流行したので、ワクチンを手配したためか、だいぶんおさまったらしいが、ほんとにうれいことである。

私には、小児マヒについては、多くの深い思い出がある。思い出などというはおろかなことで、私はその後遺症をれっきとして右脚にもっているのである。しかし、そのことをあまり気になけなくなっている今日では、思い出などとうっかり書いてしまったのも、決してうそではない。

私がかかったのは、三十四才の秋、昭和十三年の関西地方の大流行のときである。むろんそのときは、いまが大流行期なのだなどは全然知らなかったことである。全く、そのときは世間もさわがなかった。

私は、大津の女子師範の附属小学校の主事になったばかりであった。九月の新学期を元気で迎えたが、まもなく、少し熱が出

て、からだがだるく、普通の風邪のようでもあるが、いつもは少し感じがちがっていた。私が舎監長をやめた送別会のた

めに、寮にもいったが、何かしら足が重くてならなかった。そのころ、街で警報伝達の訓練が盛で、熱があっても休むわけにいかず、詰所に出かけて空襲警報を叫んだときも、からだや下肢がだるくてならなかった。

十日ばかりたったとき、朝めざめると、自分の右の足が自由にならなくなっているのに気づいた。皮膚の感覚は正常であるが、右足を動かすのが非常に困難であった。医者に見てもらっても、特別の治療はない、せいぜいマッサージぐらいのことだった。私は結局一月ぐらい学校を休んだかとおぼえているが、何とか足を動かせるようになって、杖をついてピッコをひきながら出勤するようになった。

実は、足を自分でマッサージしたり、意識的に足を動かす練習をしながら、いろいろ

ろな暗い思いをくり返した。そのことをここに今さら書きたても仕方がなからう。いうまでもなく、精神的な苦しみの方が、肉体的なそれよりもずっと深いものがあつた。

ある日、電車がきたので、いそいで乗ろうとした。おどろいたことには、右半身がすっかり地べたに吸いつけられたみたいで、うしろに残ってしまったのである。電車を見おくりながら、私ははつきりと事態を自覚した。それからは、決して今までのようなせっかちな行動をとらないことにした。そこから中を歩きまわったり、スポーツをやったり、とび乗りやとび降りをするなど、ふつりやめた。道を横切るときでも信号を守るようになった。そのおかげで、登山やスポーツなどでげがをすることなどがなくなったし、自動車にもはねられずに今日生きながらえているのは、一つにはこの足のおかげである。と同時に、人間のからだというものが、どんなに深くこころと結びついているものか、ということ、からだに欠陥をもつことよって、深くきとらされた。

* * *